

国木田独歩

牛肉と馬鈴薯



牛肉と馬鈴薯

明治倶楽部クラブとして芝区桜田本郷町のお堀辺ほりばたに西洋作づくりの
余り立派ではないが、それでも可なりの建物があつた、
建物は今でもある、しかし持主が代つて、今では明治倶
楽部その者はなくなつて了しまつた。

この倶楽部が未まだ繁盛していた頃のことである、或年ある
の冬の夜、珍らしくも二階の食堂に燈火あかりが点ついて、
時々おりおり高く笑う声が外面そとに漏れていた。元来いったいこの倶楽部は
夜分人の集つてゐることは少ないので、ストーブの煙は

平常も昼間ばかり立ちのぼっているのである。

然るに八時は先刻打つても人々は未だなかなか散じそ
うな様子も見えない。人力車が六台玄関の横に並んでい
たが、車夫どもは皆な勝手の方で例の一六勝負最中らし
い。

すると一人の男、外套の襟を立てて中折帽を面深に被
つたのが、真暗な中からひよつくり現われて、いきなり
手荒く呼鈴を押した。

内から戸が開くと、

「竹内君は来てお出ですかね」と低い声の沈重いた調子

7
で訊たずねた。

「ハア、お出で御座います、貴あな様は？」と片眼の細顔の、和服を着た受付が丁寧に言った。

「これを」と出いだした名刺には五号活字で岡本誠夫せいふとしてあるばかり、何の肩書もない。受付はそれを受取り急いで二階に上って去いったが間もなく降りて来て

「どうぞ此方こちらへ」と案内した、導かれて二階へ上ると、ストーブストーブを熾さかんに燃たいたので、ムツとする程あつた温かい。ストーブストーブの前には三人、他の三人は少し離れて椅子に寄っている。傍かたわらの卓子テーブルにウイスキーの壺びんが上のつっていてこつぶの飲み干

したるもあり、注いだままのもあり、人々は可い加減に酒が廻わっていたのである。

岡本の姿を見るや竹内は起つて、元気よく

「まあこれへ掛け給え」と一の椅子をすすめた。

岡本は容易に坐に就かない。見廻すとその中の五人は兼て一面識位はある人であるが、一人、色の白い中肉の品の可い紳士は未だ見識らぬ人である。竹内はそれと気がつき、

「ウン貴様は未だこの方を御存知ないだろう、紹介しましょう、この方は上村君と言って北海道炭鋳会社の社員

の方です、上村君、この方は僕の極く旧いふる朋友ともたちで岡本君……」

と未だ言い了おわらぬに上村と呼ばれし紳士は快活な調子で

「ヤ、初めて……お書きになった物は常に拝見していますので……今後御懇意に……」

岡本は唯ただ「どうかお心安く」と言っただぎり黙ってました。そして椅子に倚よった。

「サアその先を……」と綿貫わたぬきという背の低い、真黒の頬ほお髭ひげを生はやしている紳士が言った。

「そうだ！ 上村君、それから？」と井山いやまという眼のしよぼしよぼした頭あたまのけ髪かみの薄い、瘦方やせがたの紳士が促した。

「イヤ岡本君が見えたから急に行りやにくくなつたハハハ」と炭鉱会社の紳士は少し羞はにかんだような笑方をした。

「何ですか？」

岡本は竹内に問うた。

「イヤ至極面白いんだ、何かの話の具合で我々の人生観を話すことになってね、まア聴きいて居給え名論卓説、滾こんこん々々として尽きずだから」

「ナニ最早^も大概^う吐き尽したんですよ、貴様^{あなた}は我々俗物党と違^{ちが}がつて真物^{ほんもの}なんだから、幸^{さいわい}貴様^{あなた}のを聞^ききましょう、ね諸君！」

と上村は逃げかけた。

「いけないいけない、先^まず君の説を終^おえ給え！」

「是非承^うわりたいものです」と岡本はウイスキーを一^{いっ}杯、下にも置^おかないで飲^のみ干^かした。

「僕^わのは岡本君^{さん}の説とは恐^{おそ}らく正^{ただ}反対^{はんたい}だろうと思^{おも}うんでね、要^つ之^{まり}、理想^{りやう}と実^{じつ}際^{さい}は一^{いっ}致^ちしない、到底^{たいてい}一^{いっ}致^ちしない……」

「ヒヤヒヤ」と井山が調子を取った。

「果して一致しないとならば、理想に従うよりも実際に服するのが僕の理想だということです」

「ただそれだけですか」と岡本は第二の杯を手にして唸うなるように言った。

「だってねエ、理想は喰たべられませんか！」と言った上村の顔は兎うさぎのようであった。

「ハハハハビフテキじゃアあるまいし！」と竹内は大口を開けて笑った。

「否いやビフテキです、実際はビフテキです、スチューで

す」

「オムレツかね！」と今まで黙って半分眠りかけていた、真紅まっかな顔かほをしている松木、坐中で一番年の若そうな紳士が真面目まじめで言った。

「ハツハツハツハツ」と一坐が噴飯ふきだした。

「イヤ笑いごとじゃアないよ」と上村は少し躍起やつきになつて、

「例えてみればそんなものなんで、理想に従したがえば芋いもばかり喰くっていないなきやアならない。ことによると馬鈴薯いもも喰くえないことになる。諸君は牛肉と馬鈴薯いもとどっちが可い

い？」

「牛肉が可いねエ！」と松木は又た眠むような声で真面目に言った。

「然しビフテキに馬鈴薯いもは附属物つきものだよ」と頬髭ほおひげの紳士が得意らしく言った。

「そうですとも！理想は則すなわち実際の附属物つきものなんだ！馬鈴薯いもも全まるきり無いと困る、しかし馬鈴薯ばかりじゃア全く閉口する！」

と言つて、上村はやや満足したらしく岡本の顔を見た。
「だって北海道は馬鈴薯じゃがいもが名物だつて言うじやアありま

せんか」と岡本は平気で訊たずねた。

「その馬鈴薯なんです、僕はその馬鈴薯には散々酷ひどい目に遇あったんです。ね、竹内君は御存知ですが僕はこう見えても同志社の旧ふるい卒業生なんで、矢張やはりその頃は熱心なアーメンの仲間で、言い換ゆれば大々的馬鈴薯党だったんです！」

「君が？」とさも不審そうな顔色かおつきで井山がしよぼしよぼ眼まなこを見張まった。

「何も不思議は無いサ、その頃はウラ若いんだからね、岡本君はお幾いくつ歳かしらんが、僕が同志社を出たのは二十

二でした。十三年も昔なんです。それはお目に掛けたいほど熱心なる馬鈴薯党でしたがね、学校に居る時分から僕は北海道と聞くと、ぞくぞくするほど惚ほれていたもんで、清教徒ピュリタンを以もつて任じていたのだから堪たまらない！」

「大変な清教徒ピュリタンだ！」と松木が又た口を入れたのを、上村は一寸ちよつとと腮あごで止めて、ウイスキーを嘗なめながら

「断然この汚けがれたる内地を去って、北海道自由の天地に投じようと思いましたがね」と言った時、岡本は凝然じつと上村の顔を見た。

「そしてやたらに北海道の話聞いて歩いたもんだ。伝

道師の中うちに北海道へ往いつて来たという者があると直ぐ話を聴きに出掛けましたよ。ところが又先方は甘うまいことを話して聞かすんです。やれ自ネーチュール然ルがどうだの、石狩川は洋々とした流れだの、見渡すかぎり森又た森だの、堪堪つたもんじゃアない！ 僕は全然すっかりまいツちまいました。そこで僕は色々こんなと聞きあつめたことを総合して如此こんなふうな想像を描いていたもんだ。……先ず僕が自己の額あずきに汗まして森を開き林を倒し、そしてこれに小豆あずきを撒まく、……」

「その百姓が見たかったねエハツハツハツハツハツハツ」と竹内は笑いだした。

「イヤ実地行やつたのサ、まア待ち給え、追い追い其処そこへ行くから……、その内にだんだんと田園が出来て来る、重おもに馬鈴薯じゃがいもを作る、馬鈴薯さえ有りやア喰うに困らん……」

「ソラ馬鈴薯が出た！」と松木は又た口を入れた。

「其処で田園の中央まんなかに家がある、構造は極きわめて粗末だが一見米国風に出来ている、新英ニューイングランド洲殖民地時代そのままといふ風に出来ている、屋根がこう急勾配きゆうこうばいになつて物々しい煙突が横の方に一ツ。窓を幾個いくつ附けたものかと僕は非常に気を揉もんだことがあつたツけ……」

「そして真個ほんどにその家が出来たのかね」と井山は又しよ

ぼしよぼまなこ眼を見張った。

「イヤこれは京都に居た時の想像だよ、窓で気を揉んだのは……そうだそうにやくおうじだ若王寺へ散歩に往って帰る時だった！」

「それからどうしました？」と岡本は真面目で促がした。

「それから北の方へ防風林を一くかく区劃、なるべくは林を多く取って置くことにしました。それから水の澄み渡った小川がこの防風林の右の方からうねり出て屋敷の前を流れる。無論この川で家鴨あひるや鶯がちょう鳥がその紫の羽や真白な背

を浮べてるんですよ。この川に三寸厚サの一枚板で橋が懸かかっている。これに欄干を附けたものか附けないものかと色々工夫したが矢張り附けないほうが自然だということさだんで附けないことに定めました……まア構造はこんなものですが、僕の想像はこれで満足しなかつたのだ……先ず冬になると……」

「ちよツとお話の途中ですが、貴様あなたはその『冬』という音おんにかぶれやアしませんでしたか？」と岡本は訊たずねた。

上村は驚ろいた顔色をして

「貴様はどうしてそれを御存知です、これは面白

い！ さすが貴様は馬鈴薯党だ！ 冬と聞いては全く堪^{たま}りませんでしたよ、何だかその冬^{すなわ}則ち自由というよう
な気がしましてねエ！ それに僕は例の熱心なるアーメ
ンでしようクリスマス万歳の仲間でしょう、クリスマス
と来るとどうしても雪がイヤという程降って、軒から棒
のような氷柱^{つらら}が下っていないと嘘^{うそ}のようですねエ。だ
から僕は北海道の冬というよりか冬則ち北海道という感
が有ったのです。北海道の話^きを聴^きても『冬になると……』
とこういわれると、身体^{からだ}がこうぶるぶるツとなったもの
です。それで例の想像にもです、冬になると雪が全然^{すっかり}家

を埋めて了う、そして夜は窓硝子から赤い火影がチラチ
 ラと洩れる、折り折り風がゴーツと吹いて来て林の梢
 から雪がばたばたと墜ちる、牛部屋でホルスタイン種の
 牝牛がモーツと唸る！」

「君は詩人だ！」と叫けんで床を靴で蹴ったものがあ
 る。これは近藤といつて岡本がこの部屋に入つて来て後
 も一言を発しないで、唯だウイスキーと首引をしてい
 た背の高い、一癖あるべき顔構をした男である。

「ねエ岡本君！」と言ひ足した。岡本はただ、黙言て
 首肯いたばかりであつた。

「詩人？　そうサ、僕はその頃は詩人サ、『山々霞み入合かすの』いりあいていうグレーのチャルチャードのほんやく翻訳を愛読して自分で作ってみたものだアね、今日こんにちの新体詩人から見ると僕は先輩だアね」

「僕も新体詩なら作ったことがあるよ」と松木が今度は少し乗地のりじになつて言った。

「ナーニ僕だつて二ツ三ツ作やったものサ」と井山が負けぬ気になつて真面目で言った。

「綿貫君、君はどうだね？」と竹内が訊ねた。

「イヤお恥しいことだが僕は御存知おんなげの女気おんなげのない通り詩

鈴薯党なんだね」と上村は大おおに面目を施おこしたという顔色かおつき。

「お話の先を願ねがいたいものです」と岡本は上村を促うながした。

「そうだ、先をやり給たまえ！」と近藤は殆ほとんど命令するようように言った。

「宜よろしい！ それから僕は卒業するや一年ばかり東京でマゴマゴしていたが、断然と北海道へ行ったその時の心持こころもちといったら無いね、何だかこう馬鹿野郎ばかやろう！ というよような心持がしてねエ、上野の停車場ステーションで汽車へ乗のって、ピ

ユーツと汽笛が鳴って汽車が動きだすと僕は窓から頭を出して東京の方へ向いて唾つばきを吐きかけたもんだ。そして何とも言えない嬉うれしさがこみ上げて来て人知れずハンケチで涙を拭ふいたよ真実ほんに！」

「一寸ちよつと君、一寸と『馬鹿野郎！』というような心持とというのが僕には了解が出来ないが……そのどういふんだね？」と権利義務の綿貫が真面目で訊ねた。

「唯ただ東京の奴等やつらを言ったのサ、名利みょうりに汲きゆう々きゆうとしてい
るその醜態ぎまは何だ！ 馬鹿野郎！ 乃公おれを見ろ！ とい
う心持サ」と上村もまた真面目で註解ちゆうかいを加えた。

「それから道行みちゆきは抜にして、ともかく無事に北海道は札幌へ着いた、馬鈴薯の本場へ着いた。そして苦もなく十万坪の土地が手に入った。サアこれからだ、所謂いわゆる額に汗するのはこれからだというんで直ただちに着手したね工。尤もつとも僕と最初から理想を一にしている友人、今は矢張やっぱり僕と同じ会社へ出ているがね、それと二人で開墾事業に取掛ったのだ、そら、竹内君知っておるだろう梶原信太かじわら郎のことサ……」

「ウン梶原君が!? あれが矢張やっぱり馬鈴薯だったのか、今じゃア豚ぶとのように肥ふとってるじゃアないか」と竹内も驚い

たようである。

「そうサ、今じやア鬼のような顔つらをして、血のたれるビフテキを二口に喰つて了うんだ。ところが先生僕と比較すると初はじめから利口であつたねエ、二月ばかりも辛棒していたらうか、或ある日こんな馬鹿気たことは断然よそ止うといふ動議を提出した、その議論は何も自からこんな思をして隠者になる必要はない自然と戦うよりか寧むしろ世間と格闘しようじやアないか、馬鈴薯よりか牛肉の方が滋養分が多いというんだ。僕はその時大おおに反対した、君止よすなら止せ、僕は一人でもやると力味りきんだ。すると先生や

るなら勝手にやり給え、君もも少しすると悟るだろう、要するに理想は空想だ、痴人の夢だ、なんて捨台辞すてぜりふを吐いて直ぐ去いって了った。取残された僕は力味りきんではみたものの内ない心細ないかった、それでも小作人の一人二人を相手にその後、三月ばかり辛棒したねエ。豪えらいだろう！」

「馬鹿なんサ！」と近藤が叱しかるように言った。

「馬鹿？　馬鹿たア酷だ！　今から見れば大馬鹿サ、然しその時は全く豪えらかったよ」

「矢張やっぱり馬鹿サ、初はつから君なんかの柄へらにないんだ、北海道で馬鈴薯くわばかり食くうなんていう柄へらじゃアないんだ、それ

を知らないで三月も辛棒するなア馬鹿としか言えな
い！」

「馬鹿なら馬鹿でもよろしいとして、君のいう『柄にな
い』ということは次第に悟って来たんだ。難有ありがたいことに
は僕に馬鈴薯の品質がが無かったのだ。其処そこで夏も過ぎて
楽しみにしていた『冬』という例の奴が漸次だんだん近づいて来
た、その露つゆはらい払が秋、第一秋からして思ったよりか感心
しなかったのサ、森しんとした林の上をパラパラと時雨しぐれて来
る、日の光が何となく薄いような気持がする、話相手は
なしサ食うものは一粒幾いく価くらと言いいそうな米を少しばかり

と例の馬の鈴、寝る処ところは木の皮を壁に代用した掘立小屋

「それは貴様あなた覚悟の前だったでしょう！」と岡本が口を入れた。

「其処ですよ、理想よりか実際の可いいほうが可いというのは。覚悟はしていたものの矢張やはり余り感服しませんでしたねエ。第一、それじゃア瘦やせますもの」

上村は言つて杯で一寸と口を湿しめして

「僕は痩せようとは思つていなかった！」

「ハツハツハツハツハツハツ」と一みんな同笑いだした。

「そこで僕はつくづく考えた、なるほど梶原の奴の言つた通りだ、馬鹿げきっている、止そうツというんで止しちゃまったが、あれであの冬を過ごしたら僕は死しんでいたね」

「其処あそこでどういふんです、貴様の目下もっかのお説は？」と岡本は嘲あざけるような、真面目な風で言った。

「だから馬鈴薯こらいりには懲々こらこらしましたというんです。何でも今は實際主義で、金が取れて美味うまいものが喰くえて、こっやうストローブブと煖炉ストーブにあたって酒を飲んで、勝手な熱を吹き合あう、腹すいが減すいたら牛肉を食くう……」

「ヒヤヒヤ僕も同説だ、忠君愛国だつてなんだつて牛肉

と両立しないことはない、それが両立しないというなら
 両立させることが出来ないんだ、其奴そいつが馬鹿なんだ」と綿
 貫は大に敦圀いきまいた。

「僕は違うねエ！」と近藤は叫んだ、そして煖炉を後に
 椅子へ馬乗になった。凄すごい光を帯びた眼で坐中を見廻し
 ながら

「僕は馬鈴薯党でもない、牛肉党でもない！　上村君な
 んかは最初、馬鈴薯党で後に牛肉党に変節したのだ、即
 ち薄志弱行だ、要するに諸君は詩人だ、詩人の墮落した
 のだ、だから無暗むやみと鼻をぴくぴくさして牛うしの焦こげる臭においを嗅か

いで行く、その醜体みにまつたらない！」

「オイオイ、他人ひとを悪口あくぐちする前に先ず自家の所信を吐くべしだ。君は何の墮落だらくなんだ」と上村が切り込んだ。

「墮落？ 墮落だらくたア高い処から低い処へ落ちたことだろ
う、僕は幸さいわいにして最初から高い処に居ないからそんな
外見みっともないことはしないんだ！ 君なんかは主義で馬鈴薯
を喰くったのだ、嗜すきで喰くったのじゃアない、だから牛肉
に餓うえたのだ、僕なんかは嗜すきで牛肉を喰くうのだ、だか
ら最初から、餓うえぬ代り今だつてがつがつしない、……」
「一向要領を得ない！」と上村が叫こげんだ。近藤は直ただち

に何ごとをか言い出さんと身構をした時、給使きゆうじの一人がつかつかと近藤の傍そばに来てその耳に附いて何ごとをか囁ささやいた。すると

「近藤は、この近藤はシカク寛大なる主人ではない、と言ってくれ！」と怒鳴った。

「何だ？」と坐中の一人が驚いて聞いた。

「ナニ、車夫の野郎、又た博奕ばくちに敗けたから少し貸してくれろと言うんだ。……要領を得ないたア何だ！ 大に要領を得ているじゃアないか、君等は牛肉党なんだ、牛肉主義なんだ、僕のは牛肉が最初から嗜きなんだ、主義

でもへチマでもない！」

「大に賛成ですなア」と静しずかに沈重おちついた声で言った者が
ある。

「賛成でしよう！」と近藤はにやり笑って岡本の顔を見
た。

「至極賛成ですなア、主義でないと言うことは至極賛成
ですなア、世の中の主義って言う奴ほど愚なものはない」
と岡本はその冴さえ冴さえした眼光を座上に放った。

「その説を承あごたまわろう、是非願ねがいたい！」と近藤はそ
の四角な腮あごを突き出した。

「君は何方どちらなんです、牛と薯いも、エ、薯いもでしよう？」と上村は知った顔に岡本の説を誘いざのうた。

「僕も矢張、牛肉党に非ず、馬鈴薯党にあらずですなア、然し近藤君のように牛肉が嗜すきとも決っていないんです。勿論例もちろんの主義という手製料理は大嫌だいきらひですが、さりとして肉とか薯いもとかいう嗜好しこうにも従うことが出来ません」

「それじゃア何だろう？」と井山がその尤もつともらしいしよぼしよぼ眼まなこをばちつかした。

「何でもないんです、比喩ひゆは廢よして露骨ろこつに申しますが、

僕はこれぞという理想を奉ずることも出来ず、それなら
って俗に和して肉慾を充みたして以て我生足れりとするこ
も出来ないのです、出来ないのです、為しないのではない
ので、実をいとうと何方どちらでも可いから決めて了ったらと思
うけれど何という因果か今以て唯たった一つ、不思議な願
を持っているからそのために何方どちらとも得決えきめないでいま
す」

「何だね、その不思議な願と言うのは？」と近藤は例の
圧おしつけるような言振いぶりで問うた。

「一口には言えない」

「まさか狼おおかみの丸焼で一杯飲みたいという洒落しやれでもなかろう？」

「まずそんなことです。……実は僕、或少女むすめに懸想けそうしたことがあります」と岡本は真面目で語り出したいだ。

「愉快々々、談愈々いよいよ佳境に入いって来たぞ、それがらッ？」と若い松木は椅子を煖炉ストーブの方へ引寄せた。

「少し談はなしが突然だしぬけですがね、まず僕の不思議の願むすめというのを話すにはこの辺から初めましょう。その少女むすめはなかなかの美人でした」

「ヨウ！　ヨウ！」と松木は躍おどり上あがらんばかりに喜こん

だ。

「どちらかと言えは丸顔の色のくつきり白い、肩つきの
按排あんばいは西洋婦人のように肉附が佳よくつてしかもなだらか
で、眼は少し眠むいような風の、パチリとはししないが物
思に沈んでるといふ気味があるこの眼に愛嬌あいきょうを含めて
凝然じっと睥視みつめられるなら大概の鉄腸漢も軟化しますなア。
ところで僕は容易にやられて了ったのです。最初その女
を見た時は別にそうも思っていなかつたが、一度が二度、
三度目位から変に引つけられるような気がして、妙にそ
の女のこと気が気になつて来ました。それでも僕は未だ恋ラブ

したとは思いませんでしたねえ。

「或日僕がその女の家へ行きますと、両親は不在で唯だ女中とその少女むすめと妹いもとの十二になるのと二人ぎりでした。すると少女むすめは身体からだの具合が少し悪いと言って鬱ふさいで、奥の間に独ひとり、つくねんと座っていましたでしたが、低い声で唱歌をやっているのを僕は縁辺えんがわに腰をかけたまま聴きいていました。

『お栄さん僕はそんな声を聴かされると何だか哀れっぽくなつて堪たまりません』と思わず口に出しますと

『小妹わたくしは何故なぜこんな世の中に生きているのか解らない

のよ』と少女がさもさもむすめ頼たよりなさそうに言いました、僕にはこれが大哲学者の厭世論えんせいろんにも優まさって真実らしく聞えたが、その先は詳わしく言わないでも了解わかりましょう。

「二人は忽たちまち恋の奴隸やつことなつて了つたのです。僕はその時初めて恋の楽しさと哀かなしさとを知りました、二月ばかりというものは全まるで夢のように過ぎましたが、その中の出来事ひとつふたつの一 二お安価やすくない幕はなを談すと先ずこんなこともありましたっけ、

「或ある日午後五時頃から友人夫婦の洋行する送別会に出席しました。僕あの恋人も母に伴われて出席しました。会は

非常な盛会で、中には伯爵家の令嬢なども見えていまし
 たが夜の十時頃漸く散会になり僕はホテルから芝山内
 の少女の宅まで、月が佳いから歩いて送ることにして
 母と三人ぶらぶらと行って来ると、途々母は口を極めて
 洋行夫婦を褒め頻と羨ましそうなことを言っていました
 たが、その言葉の中には自分の娘の余り出世間的傾向を
 有しているのを残念がる意味があつて、かかる傾向を有
 するも要するにその交際する友に由ると言わぬばかりの
 文句すら交えたので、僕と肩を寄せて歩るいていた娘は、
 僕の手を強く握りました、それで僕も握りかえした、こ

れが母へ対するはかない反抗であつたのです。

「それから山内の森の中へ来ると、月が木間から蒼然たる光を洩して一段の趣を加えていたが、母は我々より五歩ばかり先を歩るいていました。夜は更けて人の通行も稀になつていたから四辺は極めて静に僕の靴の音、二人の下駄の響ばかり物々しゆう反響していたが、先刻の母の言草が胸に応えているので僕も娘も無言、母も急に真面目くさつて黙つて歩るいていました。

「森影暗く月の光を遮つた所へ来たと思つたと少女は卒然僕に抱きつかんばかりに寄添つて

『貴様母の言葉を氣にしてわたくし小妹を見捨てはいけ不可ませんよ』と囁ささやき、その手を僕の肩にかけるが早い。僕が左の頬ほおにべたり熱いものが触て一種、花にも優まさる香が鼻先を掠かすめました。突然明い所へ出ると、少女むすめの両眼には涙が一ぱい含んでいて、その顔色は物凄ものすごいほど蒼白あおしろかったが、一ひとつは月の光を浴びたからでも有りましょう、何しろ僕はこれを見ると同時に一種の寒気さむけを覚えて恐こわいとも哀かなしいとも言いいようのない思が胸むねに塞つかえてちようど、鉛なの塊かたまりが胸を圧おしつけるように感じました。

「その夜、門口かどぐちまで送り、母なる人が一寸ちよつとと上って茶を

飲めと勧めたを辞し自宅へと帰路に就つきましたが、或
 難むずかしい謎なぞをかけられ、それを解くと自分の運命の悲痛が
 ことごとく解わかりでもするといったような心持がして、決し
 て比ひ喩ゆじゃアない、確にそういう心持がして、気になつ
 てならない。そこで直ぐは帰らず山内の淋さむしい所を撰よ
 ってぶらぶら歩るき、何時いつの間にか、丸山の上に出まし
 たから、ベンチに腰をかけて暫しばらく凝じ然と品川の沖の空
 を眺ながめていました。

『もしかあの女は遠からず死ぬるのじゃアあるまいか』
 という一念が電いなのずまのように僕の心中最も暗き底ひらに閃めい

たと思うと僕は思わず躍り上がりました。そして其所らを夢中で往きつ返りつ地を見つめたまま歩るいて『決してそんなことはない』『断じてない』と、魔を叱するかのように言ってみたが、魔は決して去らない、僕はおり足を止めて地を凝視していると、蒼白い少女の顔がありありと眼先に現われて来る、どうしてもその顔色がこの世のものでないことを示している。

「遂に僕は心を静めて今夜十分眠る方が可い、全く自分の迷だと決心して丸山を下りかけました、すると更に僕を惑乱さする出来事にぶつかりました。というのは上の

時は少も気がつかなかったが路傍みちばたにある木の枝から人がぶら下っていたことです。驚きましたねエ、僕は頭から冷水ひやみずをかけられたように感じて、其所そこに突立ってしまいました。

「それでも勇気を鼓して近づいてみると女でした、無論その顔は見えないが、路にぬぎ捨てある下駄を見ると年若の女ということが分る……僕は一切夢中で紅葉館こうようかんの方から山内へ下りると突当つきあたりにあるあの交番まで駈かけつけてその由を告げました……」

「その女が君の恋していた少女むすめであったといひのですか

ね」と近藤は冷やややかに言った。

「それでは全まるで小説ですが、幸に小説にはなりませんでした。

「翌々日の新聞を見ると年は十九、兵士と通じて懐胎したのが兵士には国に帰って了しまわれ、身の処置に窮して自殺したものらしいと書いてありました、ともかく僕はその夜殆ほとんど眠りませんでした。

「然しかし能よくしたもので、その翌日少女むすめの顔を見ると平常ふだんに変わっていない、そしてそのうっとりした眼えみに笑を含んで迎えられると、前夜からの心の苦惱は霧のように消え

て了いました。それから又一月ばかりは何のこともなく、ただうれしい楽しいことばかりで……」

「なるほどこれはお安価やすくないぞ」と綿貫わたぬきが床を蹴けって言った。

「まあ黙もくって聴ききたまえ、それから」と松木は至極真面目まじめになった。

「其先さきを僕が言おうか、こうでしょう、最後おしまいにその少女むすめが欠伸あくび一つして、それで神聖なる恋おしまが最後おしまいになった、そうでしょう？」と近藤も何故なぜか真面目まじめで言った。

「ハツハツハツハツハツハツ」と二三人が噴飯ふきだして了つ

た。

「イヤ少なくとも僕の恋はそうであつた」と近藤は言い足した。

「君でも恋なんていうことを知っているのかね」これは井山の柄にない言草。

「岡本君の談話はなしの途中だが僕の恋を話そうか？ 一分間で言える、僕と或少女むすめと乙な中なかになつた、二人は無我夢中で面白い月日を送つた、三月目に女が欠伸一つした、二人は分れた、これだけサ。要するに誰たれの恋でもこれが大切おおきだよ、女という動物は三月たつと十人が十人、飽あき

て了う、夫婦なら仕方がないから結合くっついている。然しそれは女が欠伸を噛殺かみころしてその日を送っているに過ぎない、どうです君はそう思いませんか？」

「そうかも知れませんが、然し僕のは幸にその欠伸までに達しませんでした、先を聴いて下さい。

「僕もその頃、上村君さんのお話と同様、北海道熱はげの烈はげしいのに雇かかっていました、実をいうと今でも北海道の生活は好かろうと思っっています。それで僕も色々と想像を描いていたので、それを恋人と語るのが何よりの楽たのしみでした、矢張上村君の亜米利加アメリカ風の家は僕も大判の洋紙へ鉛筆で

函取^{ずどり}までしました。しかし少し違^{ちが}うのは冬の夜の窓から
ちらちらと燈火^{あかり}を見せるばかりでない、折り折り楽しそ
うな笑声、澄んだ声で歌う女の唱歌を響かしたかったの
です、……」

「だって僕は相手が無かったのですもの」と上村が情け
なそうに言ったので、どつと皆^{みんな}が笑った。

「君が馬鈴薯^{じゃがいも}党を変節したのも、一はその故^{せい}だろう」と
綿貫が言った。

「イヤそれは嘘^{うそ}言だ、上村君にもし相手があつたら北海
道の土を踏^{ふま}ぬ先に変節していただろうと思う、女と言う

奴^{やつ}が到底馬鈴薯主義を実行し得^うるもんじやアない。先天的のビフテキ党だ、ちようど僕のようなんだ。女は芋^{いも}が嗜好^すきなんていうのは嘘^{うそ}サ！」と近藤が怒鳴るように言った。その最後の一句で又た皆がどつと笑った。

「それで二人は」と岡本が平気で語りだしたので漸々^{ようよう}静まった。

「二人は将来の生活地を北海道と決めていまして、相談も漸く熟したので僕は^{ひとまず}一先故郷^{くに}に帰り、親族に托^{たく}してあつた山林田畑を^{ことごと}悉く売り飛ばし、その資金で新開墾地を北海道に作ろうと、十日間位の積^{つもり}で国に帰ったのが、

親族の故障やら代価の不折合ふおりあいやらで思わず二十日もかかりました。すると或日少女むすめの母から電報が来ました、驚いて取る物も取あえず帰京してみると、少女むすめは最早もう死んでいました」

「死んで？」と松木は叫けんだ。

「そうです、それで僕の総すべての希望が悉く水の泡あわとなつて了いました」と岡本の言葉が未だ終らぬうち近藤は左の如く言った、それが全まるで演説口調、

「イヤどうも面白い恋愛談らぶだんを聴かされ我等一同感謝の至に堪たえません、さりながらです、僕は岡本君の為めにそ

の恋人の死を祝します、祝すというが不穩当ならば喜びます、ひそかに喜びます、寧ろ喜びます、却て喜びます、もしもその少女にして死ななんだならばです、その結果の悲慘なる、必ず死の悲慘に増すものが有ったに違いないと信ずる」

とまでは頗る真面目であつたが、自分でも少し可笑しくなつて来たか急に調子を変え、声を低うし笑味を含ませて、

「何となれば、女は欠伸をしますから……凡そ欠伸に数種ある、その中尤も悲むべく憎くむ可きの欠伸が二種

ある、一は生命に倦うみたる欠伸、一は恋愛に倦みたる欠伸、生命に倦みたる欠伸は男子の特色、恋愛に倦みたる欠伸は女子によしの天性、一は最も悲しむべく、一は尤も憎むべきものである」

と少し真面目な口調に返り、

「すなわ則によしち女子は生命に倦むといふことは殆どない、年若い女が時々そんな様子を見せることがある、然しそれは恋に渴しているより生ずる変態たるに過ぎない、幸さいわいにしてその恋を得る、その後幾年月かは至極楽しそうだ、真に楽しそうだ、恐らくたのしみ楽という字の全意義はかかる

女子によしの境遇おいに於て尽うされているだらう。然しかし忽うんち倦うで了う、則すなち恋こに倦うでしまう、女子によしの恋こに倦うだ奴ほど始は末まにいけないものは決けして他にあるまい、僕わはこれを憎にくむべきものと言いつたが実は寧ろあわれむべきものところが男子はそうでない、往い々にして生い命のものに倦むことがある、かかる場合に恋こに出遇あう時は初めて一方の活路を得える。そこで全き心を捧げて恋の火中に投ずるに至るのである。かかる場合に在あつては恋則ち男子の生命である」

と言いつて岡岡本を顧顧み、

「ね、そうでしよう。どうです僕の説は穿うがっているでしよう」

「一向に要領を得ない！」と松木が叫こげんだ。

「ハツハツハツハツ要領を得ない？ 実は僕も余り要領を得ていないのだ、ただ今のように言いつてみたいので。

どうです岡本君、だから僕は思しうんだ君が馬鈴薯いも党どうでもなくビフテキ党どうでもなく唯ただ一いちの不思議ふしぎなる願ねがいを持ってもいるといいうことは、死しんだ少女むすめにあいいたいといいうんでしよう」

「否ノー！」と一声いっしやう叫こげんで岡本は椅子いすを起たつた。彼かれは最も早う

よほど
余程酔っていた。

「否ノーと先ず一語を下して置きます。諸君にしてもし僕の不思議なる願というのを聴いてくれるなら談はなしましよ
う」

「諸君は知らないが僕は是非聴く」と近藤は腕を振つた。衆みんな皆は唯だ黙って岡本の顔を見ていたが松木と竹内は真面目まじめで、綿貫と井山と上村は笑味えみを含んで。

「それでは否ノーの一語を今一度叫けんで置きます。

「なるほど僕は近藤君さんのお察さつしの通り恋愛に依よつて一方の活路を開いた男の一人である。であるから少女むすめの死は僕

に取ての大打撃、殆ど総ての希望は破壊し去ったこと
ほとん 殆ど すべ 総ての希望は破壊し去ったこと
 は先程申上げた通りです、もし例の返魂香とかいうしろもの 価物
 があるならば僕は二三百斤きん 買入れたい。どうか少女を今
 一度僕の手に戻したい。僕の一念ここに至ると身も世も
 あられぬ思がします。僕は平気で白状しますが幾度僕は
むすめ 少女を思つて泣いたでしょう。幾度その名を呼で大空を
 仰いだでしょう。実にあの少女の今一度この世に生き返
 って来ることは僕の願です。

「しかし、これが僕の不思議なる願ではない。僕の眞実
 の願ではない。僕はまだまだ大なる願、深い願、熱心

なる願を以もつています。この願さえ叶かなえば少女は復活むすめしないでも宜よろしい。復活して僕の面前で僕を売よろつても宜よろしい。少女むすめが僕の面前で赤い舌を出して冷笑しても宜よろしい。

「朝あしたに道を聞かば夕ゆうべに死すとも可なりというのと僕の願とは大に意義を異かにしているけれど、その心持は同じです。僕はこの願が叶かなわん位なら今から百年生きていても何の益やくにも立たない、一向うれしくない、寧ろ苦しゅう思います。

「全世界の人悉くこの願を有もつていないでも宜よろしい、僕独ひとりこの願を追ひいます、僕がこの願を追うたが為ためにその

為めに強盜罪を犯すに至ても僕は悔いない、殺人、放火、
 何でも関かまいません、もし鬼ありて僕に保証するに、爾なんじ
 の妻を与えよ我これを姦かんせん爾の子を与えよ我これを喰くら
 わん然しからば我は爾に爾の願を叶かなわしめんと云えば僕は
 雀じゃくやく躍して妻あらば妻、子あらば子を鬼に与えます」
 「こいつは面白い、早くその願というものを聞きたいも
 んだ！」と綿貫がその髯ひげを力任かせに引ひて叫こげんだ。
 「今に申します。諸君は今日こんにちのようなグラグラ政府には
 飽あきられただろうと思おう、そこでビスマークとカブール
 とグラッドストーンと豊ほう太たい閣かくみたような人間をつきまぜて

ひとつ

一 鋼鉄のような政府を形つくり、思切った政治をやってみたいという希望があるに相違ない、僕も実にそういう願を以ています、しかし僕の不思議なる願はこれでもない。

「聖人になりたい、君子になりたい、慈悲の本尊になりたい、クリスト基督やしやか釈迦やこうし孔子のような人になりたい、ほんと真実にそうになりたい。しかしもし僕のこの不思議なる願が叶わないで以て、そうなるならば、僕は一向聖人にも神の子にもなりたくありません。

「山林の生活！ と言ったばかりで僕の血は沸きます。則すなわち僕をして北海道を思わしめたのもこれです。僕は

折り折り郊外を散歩しますが、この頃の冬の空晴れて、遠く地平線の上に国境をめぐる連山の雪を戴いたいているのを見ると、直ぐ僕の血は波立ちます。堪たまらなくなる！

然しです、僕の一念ひとたびかの願に触れると、こんなことは何でもなくなる。もし僕の願さえ叶うなら紅塵こうじん三千丈の都会に車夫となっていてもよろしい。

「宇宙は不思議だとか、人生は不思議だとか。天地創生の本源は何だとか、やかましい議論があります。科学と哲学と宗教とはこれを研究しせんめい、そして安心立命りゆうめいの地をその上に置こうと悶もがいている、僕も大哲学者にな

りたい、ダルウィンはだし跣足というほどの大科学者になりたい。もしくは大宗教家になりたい。しかし僕の願ねがいというののはこれでもない。もし僕の願ねがが叶かなわないで以もて、大哲学者になつたなら僕は自分を冷笑し自分の顔つらに『偽いつわり』の一字を烙印らくいんします」

「何だね、早く言いたまえその願ねがというやつを！」と松木はもどかしそうに言いつた。

「言いいましょう、喫驚びっくりしちやアいけませんぞ」
「早く早く！」

岡本は静しずかに

「喫驚びっくりしたいというのが僕の願なんです」

「何だ！ 馬鹿々々しい！」

「何のこった！」

「落おとし語ばなしか！」

人々は投げだすように言ったが、近藤のみは黙言だまって岡本の説明を待っているらしい。

「こういう句があります、

Awake, poor troubled sleeper: shake off

thy torpid night-mare dream.

即ち僕の願とは夢魔むまを振り落おとししたいことです！」

「何のことだか解らない！」と綿貫は呟つぶやくように言った。

「宇宙の不思議を知りたいという願ではない、不思議な宇宙を驚きたいという願です！」

「愈々いよいよ以て謎なぞのようだ！」と今度は井山がその顔をつるりと撫なでた。

「死の秘密を知りたいという願ではない、死ちよう事実じじつに驚きたいという願です！」

「イクラでも君勝手に驚けば可いいじゃアないか、何でもないことだ！」と綿貫は嘲あざけるように言った。

「必ずしも信仰そのものは僕の願ではない、信仰無くしては片時たりとも安やすんずる能あたわざるほどにこの宇宙人生の秘義に悩まされんことが僕の願であります」

「なるほどこいつは益ますます々解りにくいぞ」と松木は眩つぶやいて岡本の顔を穴のあくほど凝視みつめている。

「寧ろこの使用つかい古ふるした葡萄ぶどうのような眼球めのだまを剋えぐり出したいのが僕の願です！」と岡本は思わず卓を打った。

「愉快々々！」と近藤は思わず声を揚げた。

「オルムスの大会で王侯の威武に屈しなかつたルーテルの胆きもは喰くいたく思わない、彼が十九歳の時学友アレキシ

スの雷死を眼まのあたり前に視みて死そのものの秘義に驚いたその心こそ僕の欲するところであります。

「勝手に驚けと言われました綿貫君さんは。勝手に驚けとは至極面白い言葉である、然し決して勝手に驚けないのです。

「僕の恋人は死しました。この世から消えて失なくなりました。僕は全然恋の奴隷やつこであつたからかの少女むすめに死なれて僕の心は搔乱かきみだされてたことは非常であつた。しかし僕の悲痛は恋の相手の亡なくなつたが為の悲痛である。死ちよう冷刻れいこくなる事実を直視することは出来なかつた。即ち恋ほ

ど人心を支配するものはない、その恋よりも更に幾倍の力を人心の上に加うるものがあることが知られます。

「曰くいわ習慣カストムの力です。

Our birth is but asleep and forgetting.

この句の通りです。僕等は生れてこの天地の間に来る、無我無心の小児こどもの時から種々な事に出遇であう、毎日太陽を見る、毎夜星を仰ぐ、ここに於おいてかこの不可思議なる天地も一向不可思議でなくなる。生も死も、宇宙万般の現象も尋常茶番となつて了う。哲学で候そつろうの科学で御座ると言つて、自分は天地の外とつに立っているかの態度を以

てこの宇宙を取扱う。

Full soon thy soul shall have her earthly freight,

And custom lie upon thee with a weight,

Heavy as frost, and deep almost as life !

この通りです、この通りです！

「即ち僕の願はどうかしてこの霜を叩はたき落さんことであります。どうかしてこの古び果カスタムてた習慣ふぎの圧力から脱のがれて、驚異の念を以てこの宇宙に俯仰ふぎ介立ようしたいのです。その結果がビフテキ主義となろうが、馬鈴薯じゃがいも主義となろうが、将はた厭世えんせいの徒となつてこの生命を咀のろうが、

決して頓とんじやく着やくしない！

「結果は頓着しません、原因げんいんを虚偽げんいんに置きたくない。習慣の上に立つ遊戯的研究の上に前提を置きたくない。

「ヤレ月の光が美だとか花の夕ゆうべが何だとか、星の夜は何だとか、要するに滔々とうとうたる詩人の文字もんじは、あれは道楽です。彼等は決して本物を見てはいない、まぼろしを見ているのです、習慣の眼が作るところのまぼろしを見ているに過ぎません。感情の遊戯です。哲学でも宗教でも、その本尊は知らぬことその末代の末流に至ては悉くそうです。

「僕の知人にこう言った人があります。吾とは何ぞや

What am I? なんちよう馬鹿な問を発して自からくるしむ苦

ものがあるが到底知れないことは如何いかにしても知れるも
んでない、とここう言つて嘲ちようしよう笑を洩もらした人があります。

世間並からいうとその通りです、然しこの問は必ずしも
その答を求むるが為めに発した問ではない。実にこの天
地に於けるこの我ちようものの如何にも不思議なること
を痛感して自然に発したる心霊の叫である。この問その
物が心霊の真面目なる声である。これを嘲あざけるのはその
心霊の麻痺まひを白状するのである。僕の願は寧ろむし、どうに

かしてこの問を心から発したいのであります。ところがなかなかこの問は口から出て心からは出ません。

「我何処いづくより来りきた、我何処にか往くゆ、よく言う言葉であるが、矢張りこの問を発せざらんと欲して発せざるを得ない人の心から宗教の泉は流れ出るので、詩でもそうです、だからその以外は悉く遊戯です虚偽です。

「もう止よみましょう！ 無益だめです、無益だめです、いくら言っても無益だめです。……アア疲労くたびれた！ しかし最後に一言ごんしますがね、僕は人間を二種に区別したい、曰くいわ驚く人、曰く平気な人……」

「僕は何方どちらへ属するのだろう！」と松木は笑いながら問うた。

「無論、平気な人に属します、ここに居る七人は皆な平気へいせいの平三へいざの種類に属します。イヤ世界十幾億万人の中うち、平気な人でないものが幾人ありましようか、詩人、哲学者、科学者、宗教家、学者でも、政治家でも、大概は皆な平気で理窟りくつを言ったり、悟り顔をしたり、泣いたりしているのです。僕は昨夜ひとつ一の夢を見ました。

「死んだ夢を見ました。死んで暗い道を独りひとでとぼとぼたど辿たどって行きながら思わず『マサカ死しのうとは思わなかつた！』

と叫びました。全くです、全く僕は叫びました。

「そこで僕は思うんです、百人が百人、現在、人の葬式に列したり、親に死なれたり子に死れたりしても、矢張り自分の死んだ後あと、地獄の門でマサカ自分が死うとは思わなかったと叫んで鬼に笑われる仲間でしょう。ハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツ」

「人に驚かして貰もらえばしやつくりが止るそうだが、何も平気で居て牛肉が喰くえるのに好んで喫驚びっくりしたいというのも物数奇ものずきだねハハハハ」と綿貫はその太い腹をかかえた。

「イヤ僕も喫驚びっくりしたいと言うけれど、矢張り単にそう言

うだけですよハハハハ」

「唯^ただ言うだけかアハハハハ」

「唯だ言うだけのことか、ヒヒヒヒ」

「そうか！　唯だお願い申してみる位なんですネハツハツハツハツ」

「矢張り道楽でさアハツハツハツ」と岡本は一所^{いっしょ}に笑ったが、近藤は岡本の顔に言う可からざる苦痛の色を見て取った。

日本文学電子図書館

牛肉と馬鈴薯・酒中日記

著 者：国木田独歩

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館